



ライトアップされた旧堺燈台。写真撮影のために訪れる人も多いという。現在の“明かり”はレプリカだが、現役時代の“明かり”も写真のような「不動緑光」(点滅しない緑色の光)だった。現役時代のレンズは堺市博物館に所蔵・展示されている。昭和 47 (1972) 年より国の史跡に指定されている。

旧堺燈台がみつめた150年

取材・文 小野寺佑紀

協力 山本尊敏(山本書院グラフィックス)
堺市文化財課

明治 10 (1877) 年、大阪の堺に木造の洋式燈台が建築された。

この燈台は約 150 年を経た今もなお、当時とほぼ同じ姿で、同じ場所に立っている。

現地に現存する洋式木造燈台としては、日本最古級だ。

明治から令和までを生きてきた「旧堺燈台」を訪れよう。

南海本線の堺駅で電車を降りて 10 分ほど歩くと、堺旧港が目前に広がる。15～16 世紀には国際貿易港として大いに栄え、今も現役の小さな港だ。さらに 10 分ほど歩き、巨大な高速道路の高架をくぐると、白色に塗られた旧堺燈台が見えてくる。散歩やランニングをする人を除けば周囲にほとんど人はいない。この燈台は、この場所で 1 世紀半、大阪・堺の盛衰をみつめてきたのだ。

堺の人々の寄付金でつくられた

旧堺燈台が建てられる以前、堺旧港には和式の灯明台が 7 度の建て替えをしながら約 200 年存在していた。明治になり、これを最先端の洋式燈台にしたいと人々は考えた。

洋式燈台の建築には多額の費用がかかる。政府に申請したが、快諾は得られない。そこで、堺の有力者たちが中心となり、町の人々に寄付を募った。建築費として 2125 円、機械購入に約 360 円(あわせると現在のおよそ 7500 万円に相当。1 円 = 3 万円として計算)が必要であり、その大半が寄付金で賄われた。完成した新しい洋式燈台は、11km 先まで明かりを届けたという。

リゾート地から工業地帯へ

洋式燈台の誕生後、周囲の状況は大きく変わっていった。堺旧港周辺は、アーバン・リゾート地としてきらめくような発展をしていったのだ。臨海公園が造られ、電車が開通し、飲食店や旅館が立ち並んだ。明治 36 (1903) 年には内国勸業博覧会(国内版の万博)が開催され、その敷地には全国に先駆けて近代的な水族館ができた。大正時代まで、燈台を含む堺旧港一帯は、昼夜を問わず活気に溢れた場所だったといわれている。

だが昭和になると、大戦の影響を受けて次第にその賑わいを失っていった。海岸の埋め立てが進んで工業地帯と化し、旧堺燈台は湾の奥に位置するようになってしまったのだ。そして昭和 43 (1968) 年、燈台は廃止となる。

そのまま古びて壊される可能性もあったはずだが、旧堺燈台はそうならなかった。堺の人々は町のシンボルとして燈台を維持し続けたのである。平成には保存のための解体修理も行われた。現在は時折、内部の一般公開やライトアップが行われている。旧堺燈台は、堺の人々や訪れる人の心を照らす存在となって今も生き続けている。❶